

令和 5 年 6 月 27 日現在

機関番号：11201

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2022

課題番号：16K04338

研究課題名（和文）家族療法の面接場面におけるジェンダーの配慮と活用に関する臨床心理学的研究

研究課題名（英文）A clinical psychological study on gender consideration and utilization in family therapy interviews

研究代表者

奥野 雅子（Okuno, Masako）

岩手大学・人文社会科学部・教授

研究者番号：60565422

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の成果は主に三つにまとめられる。一つ目は、家族療法の面接場面でメインセラピストとサブセラピストのそれぞれの役割に着目し、両者を対象にしたインタビュー調査より、ジェンダーに関して配慮すべき点、および活用できる点を提示した。

二つ目は、インタビュー調査で得た成果を実際の事例に応用して考察し、家族療法のこれからのあり方について提案を行った。

三つ目は、コロナ禍による家族の変化について未就学児をかかえる両親の働き方に着目して調査を行い、家族療法による支援のありかたについて家族のジェンダーに焦点を当てた視点を提供した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

家族療法の面接場面で両親やカップルを効果的に支援するために、メインセラピストとサブセラピストの二人がジェンダーの影響を配慮し、活用していくかについての知見を提示したことに学術的意義がある。特に、メインセラピストとサブセラピストがお互いのどのように関わるかについては個々人に任されていた観点であったが、関わり方のプロセスを示すことができたことは成果である。さらに、その知見を用いて実際の事例に援用し、事例研究として普遍的な重要ポイントを示すことができた。

加えて、今後の家族援助の視点を踏まえるために、コロナ禍における両親の就労状況のスタイルが家族に与えた変化を示したことに社会的意義がある。

研究成果の概要（英文）：The results of this research can be summarized into three main categories. First, I focused on the roles of the main therapist and the sub-therapist in interviews for family therapy, and from the interview survey of both, I presented the points that should be considered and the points that can be used regarding gender. Second, I applied the results obtained from the interview survey to actual cases and made proposals for the future of family therapy. Third, I conducted a survey on the changes in families due to the corona crisis, focusing on the work styles of parents with preschool children, and provided a gender-focused perspective on family therapy support.

研究分野：臨床心理学

キーワード：家族療法 面接場面 ジェンダー サブセラピスト メインセラピスト 父親 母親 就労状況

1. 研究開始当初の背景

家族療法の特徴のひとつは、両親あるいはカップルなど複数のクライアント(以下、CI)と同時に面接を行うことである。語られる問題には二人の間の性やジェンダーに関わる事象が伴う。一方、セラピスト(以下、Th)側もメイン Th とサブ Th の二人で面接を行うことが多く、その性やジェンダーも面接に影響を及ぼしている。しかし、二人の Th が CI にどのように配慮を行って面接を行うかといった、具体的な対応に関する知見は非常に少ない。また、両親やカップルが語る問題には二人の間の性やジェンダーに関わる事象が伴うが、メイン Th とサブ Th の二人の性やジェンダーがどのようにコミュニケーションに影響しているのか、さらに、活用していくのかという観点には着目されていない。よって、家族療法の CI 側のジェンダーに加え、Th 側のジェンダーにも焦点を当てる。

2. 研究の目的

家族療法の面接場面で両親やカップルを効果的に支援するために、メイン Th とサブ Th の二人のセラピストがどのように性やジェンダーに関わる問題に対応し、二人の Th 性やジェンダーの影響を配慮し、活用していくかについて検討することを目的とする。まず、二人の Th の関わり方のプロセスを明らかにする。次に、その関わり方を実際の支援に援用するための事例研究を行う。さらに、ジェンダーを踏まえた家族支援を行うために、コロナ禍が家族にどのような影響を及ぼしたかについて検討を行う。

3. 研究の方法

(1)インタビュー調査

メイン Th を対象にしたインタビュー調査

臨床心理士資格を有する経験を積んだ家族療法家 7 名(男性 4 名、女性 3 名)を対象にして、サブ Th とどのように関わったかについて半構造化面接を行った。平均年齢 38.5 歳(SD=4.42)、臨床経験は 13.0 年(SD=4.00)。

サブ Th を対象にしたインタビュー調査

大学院修士課程でサブ Th の経験のある、臨床心理士指定大学院の修了生 10 名(男性 4 名、女性 6 名)を対象にして、サブ Th の役割やメイン Th との関わり方の変化について半構造化面接を行った。平均年齢は 32.9 歳(SD=12.8)であった。

(2)事例研究

メイン Th は筆者(女性)が務めたが、サブ Th が男性の場合 1 例と女性の場合 2 事例、計 3 事例を取り上げ、その援助のあり方や Th 間のかかわりについて検討を行った。

(3)インターネット調査

父親 200 名(テレワーク有りの父親は 121 名、テレワーク無しの父親は 79 名)を対象とし、本人と配偶者のテレワークの有無と頻度、「家族機能」(草田・岡堂, 1993)、「養育態度」(中道・中澤, 2003)、「夫婦間コミュニケーション」(平山・柏木, 2001)について回答してもらった。

3 歳から 6 歳までの子どもがいる母親 300 名(専業主婦 100 名、就労中でテレワーク有りの母親 100 名、就労中でテレワーク無しの母親 100 名)を対象とし、「家族機能」(草田・岡堂, 1993)、「育児感情」(荒牧, 2003)、「夫婦間コミュニケーション」(平山・柏木, 2001) 夫婦関係満足度(諸井, 1996)について回答してもらった。

4. 研究成果

< 1 - 1 > 家族療法の面接場面でメイン Th がサブ Th に関わるプロセス

インタビューデータをグランデッド・セオリー・アプローチによって分析した結果、14 個の概念、5 個のカテゴリが生成された。概念を【 】、カテゴリを で表し、以下にプロセスを記述する。

家族療法の面接場面におけるメイン Th のサブ Th への最初の関わりとして、サブ Th 選択の決定因がある。つまり、サブ Th を誰に依頼するかを選択するうえでの考え方であり、面接を開始するための準備といえる。まず、メイン Th 自身とは異なる性のサブ Th を選択するといった【メイン Th のジェンダー観】がある。逆に、大学の相談室などで行われるため、【サブ Th のトレーニングという観点】から、他の大学院生とのケース数のバランスを考えてサブ Th が選ばれることも多い。また、CI の主訴などの情報を元に、面接に効果的な【サブ Th の性を選択】することもある。次に、面接が開始されれば、メイン Th による戦略的関わり をとして【サブ Th への補助的役割を期待】することや、【サブ Th への非言語的機能の活用】がある。後者はサブ Th が男性か女性かで伝わるものが異なることを考えて関わってもらうことである。また、それを踏まえての【メイン Th によるジェンダー表現】を行う。これは CI に対して男性的/女性的に関わる といったコミュニケーションの選択である。

一方、メイン Th は進行中の面接のあり方について絶えず リフレクティング を取り入れて

いる。つまり、面接中にさまざまなフィードバックを生起させ、面接をモニターしながら、面接を進めていく。時々、【サブ Th にコメントを振る】ことで、サブ Th が発言の機会を得る。【二人の Th 間のかげ合いの呈示】を行うことで、面接における Th 側のスタンスが CI 側に伝わり、面接が活性化し CI による表現も促進されることになる。また、夫婦や親子などの複数の CI の一方が他方にどのような思いや考えがあるのかについて【CI からのフィードバック】を行う機会を導く。さらに、メイン Th は サブ Th の強みの活用 にも着目している。メイン Th はサブ Th との違いを面接で活かすといった【メイン Th/サブ Th の差異を活用】し、効果的な面接のためにサブ Th の言動を肯定するなど、【サブ Th をワンナップする】ことも行う。このように、メイン Th はサブ Th と関わりながら、サブ Th への信頼 を構築していく。それは、メイン Th が【サブ Th の面接への貢献を実感】し、あらためて【サブ Th のポテンシャルへの気づき】、【メイン Th による不完全さの受容】をすることにもなりうる。

以上のプロセスより、メイン Th はサブ Th をトレーニングする立場であることが多いが、サブ Th が誰になるかが決定し面接に臨んだ際、メイン Th とサブ Th のコミュニケーションの相互作用を通し、サブ Th の強みを引き出して活用することができることが示唆された。また、CI を含む Th-CI システムにも良循環が生起し、面接の成功と共にサブ Th の成長も導かれると考えられる。さらに、メイン Th にとっては面接をサブ Th と協働で行うことで自身の不完全さを受容することにもつながるといえる。したがって、家族療法の面接場面におけるメイン Th のサブ Th への関わり方は、サブ Th のトレーニングという観点だけではなく、サブ Th の強みを引き出して活用し、リフレクティングを通して面接をよりシステミックにすることができる。メイン Th は CI 支援に関して自身の完璧さを追求する必要はなく、サブ Th との協働によってサブ Th への信頼感を促進させ成長に寄与することで、結果として面接により貢献できることが推察される。

< 1 - 2 > 家族療法の面接場面でサブ Th が成長するプロセス

インタビューデータをグランデッド・セオリー・アプローチによって分析した結果、30 個の概念、7 個のカテゴリが生成された。概念を【 】、カテゴリを で表し、以下にプロセスを記述する。

家族療法の面接場面において サブ Th による面接初期の構え は、【参加することの責任感】による【緊張】や【評価に対する不安】、そして【遠慮】しながらも【記録に集中しがんばる】こと、【会話についていくのが精一杯】という状況である。そこで、【メイン Th の観察】し、【メイン Th のじゃまをしてはいけない】という思いを抱え、【発言のタイミングの難しさを意識】しながらも、【メイン Th に重ねて同じことを言う】ことで サブ Th が面接の補助的役割を遂行しようとする態度 を示す。その後、サブ Th による主体的関わりの試み を始動させる。サブ Th は【記録の取捨選択】ができるようになり、【メイン Th がフォローしてくれるという思い】をもち、【メイン Th と異なる意見を述べる】ことにチャレンジできるようになる。また、【非言語行動を用いて CI に関わろうという意識】や【うなずきに伴い言葉が出る】ようにもなってくる。

次に、メイン Th が【サブ Th の意見を面接で取り上げる】こと、【サブ Th の発言にうなずく】こと、そして、【アセスメントを共有】し、サブ Th が【メイン Th からのコメント】をもらうことで、メイン Th との協働関係の構築を実感 できるようになる。一方、【CI が視線を向けてくれる】ことや CI から【IP の投影】をされたり、【サブ Th と CI で会話が進行】するようになり、【CI をリラックスさせている実感】をもつといった、CI への影響を認知 できるようになる。メイン Th との協働関係や CI への影響を確認できることでサブ Th の主体的行動も促進される。

さらに、【自由に発言して大丈夫】だと思えるようになり、【サブ Th の存在価値の気づき】が起こり、【CI の選択肢を拡大】していることや、【メイン Th との関わりを CI に見せる】といった サブ Th の新たな役割の獲得 がなされるようになる。最終的には、面接をシステミックに捉えるパラダイムシフト が生起する。それは、【Th 2 名の関係性の面接への影響を理解】できるようになり、【面接の流動性を認知】すること、また、【面接方針のぶれなさの実感】が湧くことである。

以上のプロセスより、サブ Th は面接初期では、自身の行動がメイン Th や面接に対してネガティブな影響を与えことを予防したいという直線的思考から始まる。補助的役割を果たそうと務めるが、面接場面はあらゆる相互作用の中でシステミックに動いていることを理解できるようになり、自身の発言や行動が面接の展開に寄与できるという確信を得ることが示唆された。最終的には、サブ Th がシステム内にいる存在価値や影響力を理解し、面接がどのようにも展開しうる流動性を認知すると共に、Th システムの機能によって面接方針のぶれなさをも実感できるようになる、といった成長プロセスが推察される。このように、面接を通してサブ Th は面接をシステミックに捉えるようにパラダイムシフトを体験していることが考えられる。したがって、家族療法の面接場面におけるサブ Th のトレーニングでは、メイン Th とアセスメントを共有しながら、サブ Th の発言や行動を CI との関わりの中で取り上げて活用し、その影響について理解を促すことができる。メイン Th はサブ Th が補助的役割以上の役割を体験できるようにサブ Th の主体性を導く必要がある。それには、メイン Th とサブ Th との関わりを CI に表現していくといった視点も重要であるといえる。

< 2 - 1 > 高齢者のカップルセラピーの課題についての一考察（事例研究）

家族療法を中心とした心理面接の事例を通して、高齢者のカップルセラピーのあり方における課題について考察を行うことを目的とした。本面接では、家族ライフサイクルの視点から夫婦間コミュニケーションに焦点を当てて支援を行った。メイン Th とサブ Th は両者とも女性であり、8回の面接を行なった。本事例は高齢者カップルの認知に変化が見られた時点で終結に至った。夫婦の一方が他方に行動変化を望んだが、相手に変化がみられなかったことより、お互いに相手をコントロールすることはできないと認識したことになるが、夫婦間コミュニケーションの変化を導くことはできなかった。本事例から高齢者のカップルセラピーの課題に関して主に3つの観点が示唆された。第一に、高齢者カップルの行動変化への抵抗を扱っていく必要があり、コミュニケーションを変化させることが難しいことをセラピストらは受容し、お互いに積み上げてきた価値観や良いところを洞察してもらう必要がある。第二に、高齢者カップルは家族ライフサイクルの時期的な問題によって物理的な距離は近くなるが、それによって葛藤が生起する際には、家族以外の外部とつながることによって夫婦の心理的距離を維持していくことにも焦点を当てる必要がある。第三に、高齢者のカップルセラピーでは、高齢者のジェンダーの問題を扱っていく必要がある。高齢者自身がジェンダーに関する感情を主体的に表現でき、考え方や態度を柔軟に選択していけるような支援が重要であるといえる。

< 2 - 2 > 家族療法の面接場面におけるサブセラピストの機能に関する一考察（事例研究）

刑事施設収容中の娘に対する関わりに苦悩し、その後約1年を経て娘との関係修復を果たした両親の心理面接事例から、家族療法におけるサブ Th の果たす役割や機能について考察を行うことを目的とした。心理面接は、女性のメイン Th と男性のサブ Th の2名が担当し、9回の面接を行なった。本事例から、サブ Th の果たす役割や機能に関して大きく3つの点が示唆された。第一に、面接の中でサブ Th がメイン Th とは異なるオルタナティブな視座の提供を行ったことで、面接に新たな展開を与える脱構築の機能が促進されたと考えられる。第二に、サブ Th が存在する面接構造では、CI の行動変化を引き出し、両親間の関係性に変化が生じてくるようなシステム的な動きが促進される可能性が考えられた。そして第三に、サブ Th のノンバーバル行動による関わりが面接プロセスに影響を与える可能性が示唆された。以上より、サブ Th が面接に加わることは、面接での選択肢や方向性に影響を与え、より効果的な支援を可能にすると考える。

< 2 - 3 > 長期間のうつ状態を抱える母親への家族療法による支援（事例研究）

10年間にわたるうつ病のために思い通りに行動することができず社会復帰したいと考えていた40代女性 CI に対する、人間関係に焦点を当てた支援のプロセスを検討した。メイン Th とサブ Th は両者とも女性であり、11回の面接を担当した。Th らは CI の他者とのコミュニケーションパターンを変えることを目指し、精神的に安定している時の行動を尋ねることで問題が解決している状態を探索した。CI は、子どもを育てながら母親との良好な関係を維持するために多大な努力をしたことを理解し、落ち込まなくても良いと気づきを得た。そして、CI は自身の状態について家族と理解し合う行動パターンを確立し、休憩が必要であることを家族に伝えた。さらに家族は CI の気持ちに理解を示し、復職への希望を受け入れた。その後、CI は適度なペースで徐々に社会活動を拡大し、資源を活用しながら問題を解決して自身の力で社会復帰を目指すことができる自信をつけた。家族療法が対人関係にどのように介入し、長期間のうつ状態を抱える母親を支援することができたかを論考した。

< 3 - 1 > 父親の働き方が家族機能に与える影響

コロナ禍において父親の働き方が変化したことによる家族への影響を検討した。テレワークに着目し、父親の働き方がテレワークを行ったか否かによって家族機能に与える影響を検討した結果、テレワークを行った方が行わなかった場合に比べて、家族機能が促進することが示唆された。つまり、コロナ禍の影響で家族のつながりが強まり家族関係が良好になったことが推察される。

また、父親の働き方がテレワークになることで父親の子どもへの養育態度も変化していた。父親が在宅となることで、しつけを強化するといった強制的態度と子どもの意図を優先する共感的態度の両方が促進される結果となった。これらの結果から、父親が子どもへの関わりが増えることは、育児への参与が促進されることにつながるといえる。しかし、この2つの養育態度の強制的と共感的は矛盾するように捉えられるかもしれない。これらの態度は、育児場面の状況によっては両者とも重要であり、子どもの発達段階に応じて適切に選択して用いることが必要であると考えられる。

さらに、父親の働き方がテレワークになることで妻(母)へのコミュニケーションも変化する

傾向があることが示された。父親が在宅になることで妻への威圧的なコミュニケーションが減少する傾向にあった。このことは夫婦が共有する時間が増えることで、より対等な関係になれる可能性が示されたといえる。

これらの結果は、テレワークの有無自体が家族機能に影響を与えるというよりも、働き方が変化したことで父親の家族への関わり方が変化し、家族内コミュニケーションの変化を通して親子関係や夫婦関係が変化したことの影響によると考えられる。

以上より、コロナ禍の影響で父親の働き方が変化しテレワークを行うことで在宅になった場合には、家族関係がより良好な状態になるチャンスであると捉えられる。これまで、父親が外に働きに出て仕事が忙しく家族に関われなかった場合でも、テレワークになることで在宅になり、父親は家族メンバーとより直接関わられるような環境に変化する。そこで、父親がこれまでより多くの時間を子どもと積極的に関わることで家族の情緒的つながりや家族に問題があっても解決できる能力が向上することになる。また、妻に対しては威圧的態度ではなく、妻との心理的距離を縮めるようなコミュニケーションを用いることも、家族のつながりや強みを促進することにつながる。したがって、父親はテレワークになり、より多くの時間を家族と過ごすようになる場合は、自身のコミュニケーションを家族メンバーに参与できるように意識し、変化させることが望ましいといえる。

< 3 - 2 > 母親の就労状況が家族関係に与える影響

コロナ禍において未就学児をもつ母の就労状況が家族関係に与える影響について検討した。母が専業主婦あるいは就労している母がテレワークを行ったか否かによって家族関係にポジティブにもネガティブにも影響を与えることが示された。その影響は夫(父)のテレワークの有無によって変化することが示唆された。本研究では、専業主婦と就労している母の間で違いはみられず、就労している母のテレワークの有無によって夫婦関係および親子関係に影響を及ぼし、その影響は夫(父)のテレワークの有無によってさらに左右されることが示された。

分析結果より、母の働き方がテレワークになることで家族機能が低下することは、父の働き方がテレワークによって家族機能が促進することが報告されているため(奥野, 2022)、夫婦によって影響が異なることが明らかになった。また、父がテレワークを行っている場合に母がテレワークを行っていないと父のみが在宅になる状況になるが、その状況では母の育児負担が増加することも示された。つまり、在宅で働く父のふるまいに対して母がネガティブに感じている可能性がある。加えて、母の就労状況に関わらず、父がテレワークを行い在宅になることで母の父に対するコミュニケーションは夫婦関係に関してネガティブに働き、夫婦関係満足度も低減することが示唆された。したがって、配偶者のテレワークに対する捉え方は夫婦間で乖離していることがうかがえる。さらに、どのくらいの頻度でテレワークを行っているかの程度については、父のテレワークの程度が上がると家族関係にネガティブな影響を与えるが、反対に母のテレワークの程度が上がると家族関係にポジティブな影響を与えることが示されている。

つまり、就労している母がテレワークを行わず外に働きに行く場合は家族に対するコミットメントが下がるが、母がテレワークを行いその程度が高いと家族関係にポジティブな影響を及ぼすことになる。このような一見矛盾して見えるような結果は、母のテレワークの有無や程度自体が家族関係に影響しているわけではなく、それによって家族内コミュニケーションがどう変化したかに左右されるからであると考えられる。加えて、父がテレワークを行っているかどうかでも家族内コミュニケーションが変化するため、要因は複雑に絡み合っていることが推察される。なお、本研究は未就学児をもつ母を対象にしているため、テレワークの有無によって育児のあり方や負担に与える影響が親子関係や夫婦関係を変化させることも推察される。したがって、コロナ禍になり今まで働きに出ていた母あるいは父が在宅になって家族内の環境が変わる場合は、自身の家族内でのコミュニケーション行動や育児に関する感情が変化することが明らかになったといえる。

以上より、未就学児の子どもがいる母はテレワークを通して在宅になることで育児については融通が利くようになり、負担が軽減するため、テレワークを用いた就労は望ましいといえる。また、母がテレワークになることで父への威圧的コミュニケーションが減少することからも、母のテレワークは夫婦関係の良好さに効果的に作用することが考えられる。よって、未就学児の子どもがいる妻が就労している場合にはテレワークを用いることが推奨される。一方、妻が就労していてテレワークを行っていない場合に、夫がテレワークで在宅になることで妻の育児への負担感が増加することから、この状況では夫が育児に関する参与を意識的に行なうことが求められる。よって、夫が在宅になりコロナ前より育児への協力ができるような環境に至っているのであれば、育児の分担に関して夫婦間で相談し、新たなルールを決めることが望ましい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計12件（うち査読付論文 5件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 奥野雅子	4. 巻 69
2. 論文標題 親子のリソースを活かす支援－解決志向アプローチの立場から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 教育と医学	6. 最初と最後の頁 46 - 52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 田代仁美・奥野雅子	4. 巻 39
2. 論文標題 長期間のうつ状態を抱える母親への家族療法による支援	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 心理臨床学研究	6. 最初と最後の頁 396 - 406
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 中野歩菜見・上手由香・奥野雅子	4. 巻 37
2. 論文標題 離婚による親子間の凝集性に対する認知のズレが家族成員の主観的幸福感に与える影響	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 現代行動科学会誌	6. 最初と最後の頁 12 - 21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 山田陽花・奥野雅子	4. 巻 37
2. 論文標題 発達障がい児とその家族の支援－家族レジリエンスの視点から－	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 現代行動科学会誌	6. 最初と最後の頁 22 - 31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 村田奏美・奥野雅子	4. 巻 34(1)
2. 論文標題 親からの期待表現の認知と心理的距離がきょうだい関係に与える影響：大学生を対象とした質問紙調査から	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 家族心理学研究	6. 最初と最後の頁 26 - 39
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 野中響子・奥野 雅子	4. 巻 36
2. 論文標題 家族の関わりが祖父母の老いの認知に与える影響 孫の視点から	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 現代行動科学会誌	6. 最初と最後の頁 43 - 53
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 八重樫大周・奥野雅子	4. 巻 33(1)
2. 論文標題 発達障がい児の家族が経験する支援獲得プロセスー母親へのインタビュー調査の検討からー	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 家族心理学研究	6. 最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉谷地康平・奥野雅子	4. 巻 35
2. 論文標題 家族レジリエンスを高めるコミュニケーションに関する検討ー青年期の子の視点から	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 現代行動科学会誌	6. 最初と最後の頁 34-44
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 奥野雅子	4. 巻 103
2. 論文標題 心理臨床家がクライアントに対するジェンダーをめぐる態度 心理臨床家を対象とした質問紙調査による検討ー	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 アルテス リベラレス(岩手大学人文社会科学部紀要)	6. 最初と最後の頁 21-31
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 下橋場幸子・奥野雅子	4. 巻 32(1)
2. 論文標題 高齢者のカップルセラピーの課題に関する一考察 家族ライフサイクルの視点からー	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 家族心理学研究	6. 最初と最後の頁 41-54
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 池田航・奥野雅子	4. 巻 31
2. 論文標題 家族療法の面接場面におけるサブセラピストの機能に関する一考察	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 家族心理学研究	6. 最初と最後の頁 132-144
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 奥野雅子	4. 巻 99
2. 論文標題 心理療法におけるジェンダーに関する配慮のあり方についての一考察 家族療法の面接場面に着目した検討	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 「Artes Liberales」(岩手大学人文社会科学部紀要)	6. 最初と最後の頁 53~65
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計17件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 山田陽花・中野歩菜見・奥野雅子・仙葉沙耶・千田有那
2. 発表標題 子どもの不適応を抱える家族への支援－父親に着目して－
3. 学会等名 日本ブリーフセラピー協会第13回学術会議
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 野中響子・奥野雅子
2. 発表標題 祖父母が家族との関わりの中で老いに適応するプロセス
3. 学会等名 日本家族心理学会第38回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 山田陽花・奥野雅子
2. 発表標題 発達障害児家族における家族レジリエンス－家族レジリエンスの機能と強化要因について
3. 学会等名 日本家族心理学会第38回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 中野歩菜見・奥野雅子
2. 発表標題 "家族" とは何か－親の離婚を経験した子どもの視点から
3. 学会等名 日本家族心理学会第38回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 奥野雅子
2. 発表標題 家族療法の面接場面でサブセラピストが成長するプロセス—大学院生のトレーニングン場面に着目して
3. 学会等名 日本家族心理学会第37回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 奥野雅子
2. 発表標題 サブセラピストとブリーフセラピー
3. 学会等名 日本ブリーフセラピー協会第12回学術会議（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 野中響子・奥野雅子
2. 発表標題 孫・祖父母関係と家族機能との関連性についての検討
3. 学会等名 日本家族心理学会第37回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 山田陽花・奥野雅子
2. 発表標題 発達障がい児家族における自立を意識した子育てのプロセスの検討 思春期の子どもを持つ夫婦の関係性に着目して—
3. 学会等名 日本家族心理学会第37回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 中野歩菜見・上手由香・奥野雅子
2. 発表標題 離婚家庭の子どもが家族の認知を再構成するプロセス
3. 学会等名 日本家族心理学会第37回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 田代仁美・奥野雅子
2. 発表標題 難治性うつを抱えるシングルマザーへの支援
3. 学会等名 日本ブリーフセラピー協会第11回学術会議
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山本麻友美・奥野雅子
2. 発表標題 子どもの引きこもりに悩むシングルマザーへの支援－「任せる」という逃避から「向き合う」という対峙へ
3. 学会等名 日本ブリーフセラピー協会第11回学術会議
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 奥野雅子
2. 発表標題 メインセラピストがサブセラピストに関わるプロセス 家族療法の面接場面に着目してー
3. 学会等名 日本家族心理学会第35回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 秋臺美紀・二本松直人・奥野雅子
2. 発表標題 家族におけるジェンダーをめぐるコミュニケーションー母性・父性に着目してー
3. 学会等名 現代行動科学会第35回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 奥野雅子
2. 発表標題 家族療法の面接場面におけるメインセラピストの取り組み ジェンダーに関わる事象に着目してー
3. 学会等名 日本家族心理学会第34回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Masako Okuno
2. 発表標題 The process through which family therapists deal with the problems related to sex differences and gender: with focus on therapeutic communicatin
3. 学会等名 Internatinal Academy of Family Psychology (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 奥野雅子
2. 発表標題 ブリーフセラピーにおける性やジェンダーに関する問題解決 臨床心理士へのインタビュー調査の検討から
3. 学会等名 日本心理臨床学会 第35回大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 下橋場幸子、奥野雅子
2. 発表標題 高齢者のカップルセラピーのあり方に関する一考察 夫婦間コミュニケーションに着目して
3. 学会等名 日本心理臨床学会 第35回大会
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 若島孔文・野口修司・奥野雅子他10名	4. 発行年 2019年
2. 出版社 遠見書房	5. 総ページ数 267
3. 書名 家族心理学－理論・研究・実践－	

〔産業財産権〕

〔その他〕

奥野雅子臨床心理学研究室 http://okunolab.hss.iwate-u.ac.jp/ 奥野雅子臨床心理学研究室 http://okunolab.hss.iwate-u.ac.jp/
--

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------